

前回表紙の作者名に誤りがございました。正しくは浅賀あゆみさんの作品です。ご迷惑をおかけしましたことを心よりお詫び申し上げます。

柿崎智子さんの作品



小さくても足腰強く

新年早々、こんなことを書くのもいかなものかと思いつきながら、やはり気になることで見て見ぬふりはできないと思い、書くことにしました。新聞で「介護事業者倒産最多143件」22年コロナ禍や物価高影響の見出しを目にしました。読むと、東京商工リサーチの発表で、2022年の介護サービス事業者の倒産が、全国で過去最多になったと書いてありました。従業員10人未満の事業者が117件だそうです。10人未満ということは、小さいけれど小回りがきく、地域密着型の事業者ではないのかと思いました。

2022年は、国のコロナ支援策も縮小、物価高や人手不足も影響したのではないかとありました。営利を目的とせず、気持ちで支援、介護をしたいと思い、志一つで数人で事業所を立ち上げることは珍しくありません。ルール通りのサービスしかできないといわれる大きな事業所と違い、利用者さんのニーズにできるだけ応え、利用者さんとともに動く支援者として貴重な存在であろうかと思えます。

記事には具体的な詳細がないのでわかりませんが、多摩地域には、たくさんの心ある小さな事業者が点在

しています。町の中の小さな事務所で、志一つで仲間を募って始める人たちは、たくさんいます。かつて、かいゆうの前身「くじら雲」も、任意団体として立ち上げたときにはそうでした。とりあえず自分の身近にいる人たちで活動を始めよう、家族だけで抱えるのではなく、重いしょうがいがあっても地域に出て、地域の人たちと一緒に広い世界で生きていってほしいとの思いで活動は始まりました。

そうした志の事業者が、この困難な状況の中で持ちこたえられなくなって、事業をあきらめなくてはいけなくなることはとても残念です。大きな資本のある事業者だけが残っていく社会が健全とは思えません。大きなことはいいことだという時代は終わりました。どんな福祉事業においても、一人一人を大切に作るパーソナルなサポートが求められている中で、小さな事業者にこそ頑張ってもらいたいと思います。

かいゆうも社会福祉法人としては、決して大きくはない規模です。時代の荒波に飲み込まれないように、地域の中のニーズに応えられる法人として、より足腰を鍛えねばと思っています。(理事長 遠藤良子)

# 相談支援エプシロン

Tel 042-505-7021 Fax 042-505-7669

## 「あちら側」と「こちら側」

その昔、自分がまだ20代で毎日がつらかった頃、ある精神科医から言われて一生の宝物のみにしている言葉がある。「意識しているところであなたは苦しいのかもしれないが、意識していないところで、あなたの内部(なか)には、あたたかいものがある」「あなたの内なる自然は、まったく汚染されていない」。

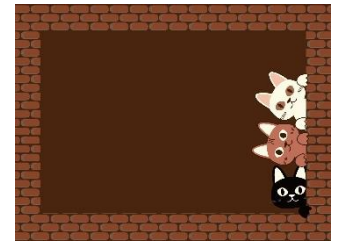
人生の中でたった一回でも、そのように他者がわたしをみてくれたということは、心の深い支えになっている。40も50も過ぎながら、「先生、だいぶ汚染されました」と時々その言葉を思い出し、この頃は、「60を過ぎたら除染していこうか。できるものかな。」と考える。

\*\*\*\*\*

「デボラが耳にしたのはただ、自分の疲れきった喘ぎだけだった——他の人にとっては易しく平坦な道でも、彼女にとってはエベレストに登るほどのことであった。(中略)平等の者同志の間では、与えたり与えられたりして恩恵は相互的なものだ。でもこれらの巨人たち——自分自身をふつうで平均的といっている人びと、生きていくという大事業を平然とやっている巨大な力の持主——彼らへの負い目は彼女の無力感を一段と痛感させ、孤独感を強めるばかりだった」

「少年たちは夕陽をうけて、長いかけを落しながら球技場を走りまわっていた。彼らは何と若々しく、強壯で、黄金色にかがやいていることか。彼らが笑いながら簡単に

やってこられる場所に到達するために、彼女は全精力と、彼女の意志の最後の一滴までも消耗したのだ。彼らと彼女をへだてる壁はまだそこにあった。そしてこれは消えることがないのだろう。今、彼女はその壁ごしに無限の美を提供する世界を見ることができる。しかし彼女自身は生存しつづけるだけで精いっぱいなのだった。」



(『デボラの世界』、ハナ・グリーン著、佐伯わか子・笠原嘉訳、みすず書房、1971)

\*\*\*\*\*

デボラのようにずっと壁の「こちら側」で生きている感覚を持ってきたけれど、この頃、自分は変わっていないと思うのに壁が動いて、自分が「あちら側」にいるような様子になることがある。そういうことが少しずつ増えてきた。驚きはあるけれど、これもまた、受け入れることと思う。

デボラに共感したとき、自分はデボラと一緒に人生の初夏にいたのだろう。「無限の美を提供する世界」は前方に広がっていた。最近では、自分の家族も年上の友人たちもエプシロンの半数以上の利用者家族も、主に加齢による病気、そしていずれ来る人生の終わりとその準備を話題にすることが多い。そういうことを共に話しているときは、自分の立ち位置が変わるというより、「あちら側」と「こちら側」の溝や境が薄れていく。それぞれが大切にしているものが前面に立ち、その他は背景に退き、シンプルなその人らしさになっていく。もしかしたら、それが「除染」なのかもしれない。(白川)



誰もが集えるみんなの居場所(10:30~18:30 日祝休み)  
日中一時支援事業(15:30~土日祝休み)

**たまりば宙**(そら)Tel/Fax 042-843-0443

## よろしくお願ひします

初めまして。昨年の夏から、たまりば宙の日中一時支援事業に勤務している山田京祐です。たまりば宙に勤める前は、都立高校の用務員をしていました。趣味は、筋力トレーニングとスポーツです。

たまりば宙は、スタッフ皆が優しく、とても働きやすい場です。利用者の方々とも、少しずつコミュニケーションが取れるようになりました。近々、たまりば宙の内装が変

わるので、前職の経験を活かして、解体や取り付けに励みたいと思います。

これから働いていく中で、利用者ひとりひとりの気持ちに立って考えられるようなスタッフになりたいです。

一生懸命がんばります。よろしくお願ひします。

(山田)





居宅介護等事業 **くじらハウス**  
短期入所 **おにぎり**

Tel 042-505-7034

Fax 042-505-7035

特定の繊維の感触が苦痛で決まった衣類しか着られない…等々、ご本人にしか分からない感覚で苦しんでいる方が想像以上にたくさんおられることはまだ十分に知られておらず、いつも残念に思います。

**雑感**

昨年、中部国際空港内にカームダウン／クールダウン用の施設ができた(国内4例め)という報道がありました。特別支援学校の教員時代に、「教室内に畳一畳サイズの小屋を作った」ことを思い出しました。高音域の音が響きすぎてお子さんたちが落ち着けなかった為です。作ってみると、超・元気なA君が苦手な近寄れなかったB君が、この中だとA君と二人で寄り添って本を読めたりできていたので、あぁよかったなと思いました。(20年近く前の話。)

感覚の特性上、蛍光灯が「点滅」して見えて辛い、夜、階下の時計の音が聞こえてしまい寝られない、味が混ざるのが苦痛で一口で一種類の食材しか食べられない、

感覚の問題に限らず、「自分がこうだからきっと相手もそうだ」と素朴に信じて、それを根拠に振舞ってしまうことを、最近では「自他境界の侵犯」と呼ぶこともあるそうです。ある判断や行動の前に、自分はこう「だけど」相手はどう?と一呼吸置いて考えられることは対人援助職であってもなくても大切なことだと思うのですが、自分自身が常にそのスタンスでいられているか、というと正直ちょっと自信がないです。まだまだ日々精進だな、と思っています。(相澤)



放課後等デイサービス

**くじらっこ**

Tel/Fax 042-505-4661



**その道のプロ**

久々の行動制限のない年末年始を過ごせたのはよかったです。また感染者も増え気を引き締めなきゃと思っています。

私はコロナ以前は、休みがあるといういろいろな出かけていたことが多かったのですが、コロナになり家で過ごす事が増え、最近では自宅の水回り辺りの壁紙を張り替えたり、車のオイル交換を試みたりと、色々やってみているのですが、やはり職人やプロの様にはいかず、その度にすごいなあ～と感じています。

私達の仕事も専門職なので、より良く楽しく過ごせたり、遊べたりできるように、しっかり取り組んでいかなきゃと思っています。(市川)

生活介護事業所

**くじら工房**

Tel/Fax 042-843-3450

見てね!

くじら工房 Instagram



**育休から復帰しました**

2022年の11月より、約1年間頂いていた育休から復帰した家村です。今回だけでなく、これまでたくさんの方にご協力を頂いて参りました。本当に感謝しております。

育休中は、家庭と真正面から向き合うことになった1年間でした。長男は小学校、次男は幼稚園に上がり、

皆それぞれ初めての環境に、家族一同混乱しました。そんな中での仕事復帰となり、始まる前は不安だらけでした。



工房クリスマスメニュー  
サンタさんも来ました



バトンタッチで育休に入った山本さんが  
赤ちゃんと遊びに来ました!

ところが、不思議なことに復帰してからのの方が、穏やかな日々を送っています。もちろん時間的、体力的には大変になったのですが、それ以上に私は家族以外の居場所が出来たことが嬉しいで

す。そして子供達は母親との時間が減っても、家が安心できる場所なのは変わらないと、わかってくれたようです。

変わらず私の第二の居場所でもくれた、くじら工房、かいゆうには感謝の気持ちでいっぱいです!(家村)



お餅の歌を歌いました

## ミラハウス

## 言葉の向こう

言葉にならない言葉を、皆さんはいつもどのように聞いておられるでしょうか。

伝わらなくてもどかしくて、表現方法を変えてみる。笑ってみたり、泣いてみたり、怒ってみたり、時には黙ってみたり。

それをただそのまま受け取るだけでは、その人の奥の方はいつまでも見えない。相手も、いくら表現方法を変えても伝わらない、とがっかりしているかもしれない。

言葉は、便利なコミュニケーションツールの一つではありますが、言葉には嘘が混ざる時もあります。騙し合いや探り合いのような面倒なことも、多くは言葉を介して行われます。反対に、言葉ではなく行動でお互いの心を理解し合える時もあります。

前にかかわりのあった利用者さんのお母様がよくお

っしゃっていた言葉を、たまに思い出します。「この子の頭の中を、私が死ぬまでに一度でいいから覗いてみたいわ」。

誰もが、誰かに一度くらいは思ったことがあるかもしれません。純粋な興味の場合もあるでしょうし、どうにかして相手を理解したい、と切に願う気持ちの場合もあるでしょう。

そして、それは叶わないこととわかっているからこそ、わかりたい、わかって欲しい、という感情が生まれるのかもしれませんが。簡単にお互いをわかってしまったら面白くないから、わざとわからないように、心は人からは見えない場所に隠してあるのかな？人間に生まれた私たちへの、難しく面白い謎解きのプレゼントなのかもしれない、と妄想しています。

言葉が生まれる前には、どのようにコミュニケーションをとっていたのでしょうかね。もしかしたら、今より少しはわかりあえたかな、と思うこともあります。(宮澤)



## すうえる

## 母との時間



認知症の母の介護をしながら働かせて頂いています。要介護2で、身体介護はそれほど必要ではありませんが、短期記憶の衰えが著しく、徘徊は無いものの未遂は数え切れず、妄想も多くなって来ました。

そんな中、昨年腹部の痛みを訴えたので病院へ連れて行ったところ、子宮頸がんが見つかり全摘手術を受け、それを期に体力面での衰えも顕著になったため、私自身の生活の拠点を移して母と同居しながら介護をしています。

もともと外交的な性格ではないので、デイサービスは頑なに拒否し、ケアマネさんとの何度にもわたる説得にも首を縦に振っては貰えません。

週1回のヘルパーさん、2週に1回の訪看さんの助けを得ながら何とか在宅で介護しつつ、月に1週間ほどのショートを利用しています。

食事も昼食の配食をお願いしていたのですが「まずい」と食べて貰えず、何箇所か試したものの変わらなかったため配食も中止し、基本的に作り置きした食事を冷蔵庫に用意しています。

仕事を終えて帰宅して鍵穴に鍵を差し込む瞬間…ある意味、一番緊張する瞬間です。

“今日は何事も無く無事だっただろうか？”

手術して退院直後は、トイレに行こうとしてベッドから滑り落ちて床に腰を強打し、そのまま私が帰るまで動けず、床に寝たまま失禁していたこともありました。

それ以来私は、夜間は母の部屋のドアの前で寝て、物音がしたらすぐに対応できる様にしています。

またある時は、何事も無かったので夕飯の支度をしながらお風呂の用意をしようと浴室に入ると、バスタブに張られたお湯の中に無数の紙オムツが…。何事かと母に聞くと涼しい顔で「”下着”が汚れたから洗濯してるのよ。」と。

ああ、そうでしたか、それはそれは…と、顔では笑いながら片付けると、汚れたのは1枚。他はまっさらな紙オムツを1パック、全てバスタブの中に浸した様でした。

徘徊は無いと書きましたが、帰宅すると玄関に佇んでいて丁度外へ行こうとしていた場面に出くわした事もあり、夜中に起き出したのでトイレかと部屋の様子を伺うと余所行きに着替えていたので声をかけると「昭和記念公園で同級生が集っているから行って来るね」と…。

「(今は入院している)叔母(母の姉)から電話来たからお茶してくるね」、「以前のパート先から、急に休みが出たから出勤してもらえないかと電話が来た」…外へ行こうとする理由は多岐にわたります。

さすがに鍵を取り上げてしまっただけからは、少なくなりましたが。

たまに外へ連れ出すと足腰が弱り、未だに慣れない杖を引きずる様にして歩き、すぐに息が上がっています。あとどれだけこうして一緒の時間をすごせるのだろうかと考えながら、自分が小さい頃に母に手を引かれて歩いていた頃を思い出しつつ、母の手を引いて歩いていると、この時間がとてもありがたく、介護の疲れも忘れさせてくれます。

先日、ためしに一緒に味噌汁を作ったのですが、何年ぶりに作ったにも関わらず、ちゃんと“母の味”でした。

味見しながら「熱いよ」と涙をそっと拭いた私を母は「何やってるのよ」と無邪気に笑っていたのでした。(坂口)



## はじめの一步ハウス

### 20周年を迎えて

近年、一步ハウスでアルバイトをしている下ノ原です。オープン当初から、一步ハウスとはお付き合いがありましたが、毎日一步ハウスに通うことは初めてで、ご縁を感じています。

11月3日(木)に、一步ハウスは20周年を迎えました。20年前に、東福祉館でオープニングセレモニーを行った時から、積み重ねて今があると思うと、感慨深いです。

たくさんの地域の方にご協力いただき、ご家族と連携しながら、皆さんが元気に過ごしていて、何より嬉しく思います。いつもありがとうございます。

日を違えて、11月23日(水)に、入居者の方々とスタッフで食事会をしました。

コロナ禍で、小さな祝いとなりましたが、外食して皆さんが楽しめたのが良かったなど実感しています。

生活にも少しずつ変化が見られ、顔のシワもお互いに少し増えたように思いますが、深みが増したと、良いように変換して、これからも小さい楽しみを見つけて、生活を充実させていきたいです。

ご協力いただくこともあるかと思いますが、これからもよろしくお祈りします。(下ノ原)

## メゾン・ド・歩人

### ゆっくりと前へ

新しい年がスタートしています。昨年末は皆さまに大変ご心配をおかけしたことお詫び申し上げます。歩人の入居者全員コロナに感染し、スタッフ、ご家族含め感染者が出ました。幸いにも軽症に済み、皆さん元気で新年を迎えられたこと嬉しく思います。

さて、私事ではございますが昨年夏、愛猫のナナが空に帰っていきました。

半年の月日が経ちましたが、ペットロス真最中です。猫(ペット)というものは不思議なもので、どんなにへとへとで家に帰ってもひとなですれば「元気チャージ」完了なのです。いなくなった時、完全に自分を見失いました。どうやって生きていけばいいのかわからなくなりました。涙が枯れて出なくなるという経験も初めてしました。



年賀状ナナ

未だ、どうしていいのかわかりませんが、自分探しをまた始めています。半世紀生きてきてスタート地点に戻ったような感覚です。とにかく目標をと思い、毎年恒例のフラメンコを本気で踊る忘年会にエントリーしました。

50歳のプチリサイタルで踊った曲と同じ曲ですが、甘えや妥協は一切なし

で、本気で打ち込みました。クリスマスイヴの本番、踊り切りました。

久しぶりに達成感を味わいました。そして、こちらも毎年恒例、年賀状にナナをデザインしました。私にできる事は、きっと数少ない事。一つずつ丁寧に確実に、ゆっくりでいいからやっつけていこう。そう思っています。(小野)



忘年会の様子

## とれいる

### 意外な趣味



昨年10月に泉から異動し、青柳の管理者となりました。中山です、よろしくお祈りいたします。

すうえるには一年ほど前からヘルプで入っていましたが、とれいるでの勤務は初めてになります。利用者さんと少しずつ信頼関係を築いていけたらと思います。

最近皆から、意外、と言われる趣味を少し紹介します。音楽はパンクが好きです。最近話題の「劇場版スラムダンク」の主題歌にもなった「10-FEET」というバンドのライブに行き、フェスへも行きました。また、バイクが好きで、大型免許もあり、今は乗っていませんが時速200キロ以上も出るバイクで日本一周もしました。冬はスノーボードをしたり、他にもいろいろな趣味がありますが、見かけたら遠慮なく声をかけてもらえたらと思います。(中山)

## 来歩ハウス

### 充実した毎日を

こんにちは。

年末は泉でもコロナ感染が多発し、ご家庭やたくさんの方々のご協力で、無事に新年を迎えることができました。ありがとうございます。今年となります。年明け早々に、冷蔵庫が壊れて新しく購入しバタバタしました。

昨年から家電製品の購入や、壁紙の補修など、助っ人さんにご協力を頂いていますが、18年たつと、あちこちでメンテナンスが必要になってきますね…。

コロナ禍での生活は続きますが、少しずつ通常に戻りつつありますよね。入居者さんの生活においても、健康で楽しく、少しでも生活が充実するよう努めていきたいと思っております。そのためにも、働くスタッフや自分自身も健康で充実した日々を送れたら良いなと思っております。(川鍋)

## 今日の一品

グループホームのごはん

# 油揚げのスナック

### 材料(2人分)

油揚げ 2枚  
青のり 適量  
塩 適量



おかずというより  
おつまみ?

### 作り方

- ① 油揚げを適当な大きさに切る。
- ② お皿に並べ、レンジで6~7分程度加熱(500W)し、サクサクにする。  
(サクサク感が足りないようなら追加で加熱する。)
- ③ 塩・青のりを混ぜて完成。

レシピ提供は、すうえるの大植さんです



サラダのトッピングにもいい!

### 献立メモ

油揚げには、肌のハリに必要な大豆イソフラボンが他の大豆製品と比べても多く含まれています。毎日の食事に加えて、冬の肌を守りましょう。

(栄養士 佐藤公子)

ありがとう  
ございました

## 2022年にご寄付下さった皆様

伊藤 邦雄 岩下 摩樹 大塚 靖子 中田 和子

国立のぞみ教会

S.T K.T N.F S.H M.K F.K 他2名様

(敬称略)

安全衛生委員会  
より

この度、職場環境改善に向けた意見交換がスムーズになることを目指し、職場巡視チェックリストを作成しました。

2023年から毎月各部署ごと、担当者に職場巡視チェックリストの記入をお願いし、半年に一度、衛生管理者(及び産業医)が巡回します。

職場巡視には、働く職員の健康状態や業務内容、

職場の雰囲気に関心を持って確認できるというメリットがあります。衛生管理者や産業医が、職員とコミュニケーションを図る大切な機会でもあります。

課題点については、安全衛生委員会の議題にあげ、リーダー会議、運営会議で協議し、フィードバックする流れとなります。

職場環境改善が、より良い支援につながることを願っています。

(くじら工房 三浦)



## 新しく職員になった人達へ

今の教育は、健常児としょうがい児は分けられて教育されます。そうした中で、健常児だけの世界、しょうがい児だけの世界で人間関係がつくれ終わっています。僕自身も、しょうがい者の中だけで成長してきました。

1980年代からは、しょうがい者も普通に地域で生きようという運動が起きました。僕は1975年から普通の大学に入り、健常者と出会いました。その体験は、怖かったり楽しかったりでした。それからは、健常者の社会の中に、しょうがい者の僕は生活を始めました。

\*\*\*\*\*

1980年代後半、学芸大学の学生たちが僕のヘルパーにたくさん来ました。その中の学生の一人が僕に、「なんで天野さんは家族と一緒にいないのか？病院に入っていないのか？危険ではないのか？」と、健常者の彼は、あたりまえの意識として言ってきました。しかし、当時の最先端の問題意識としては、しょうがい者も地域で生きることが正しいとすることが言われ始めていて、それは国際的な流れとしても言われ始めていました。

この、彼の考え方について、彼の周りの学生は「君の考え方は古い。しょうがい者も普通に地域で生きるべき時代になった。」と、古い考え方をバカにしていた。

しかし、この古い考え方をした彼は、ピンとこなかったようだ。このピンとこなかった彼は、僕のヘルパーもしていた。しかし、その問題意識が地滑りのように激変するきっかけが起きる。

彼は当時流行っていた、車いすの身体しょうがい者との富士登山の活動に参加した。1人の車いすの身体しょうがい者を、4人の健常者が前2人と後ろ2人で、無理やり富士山を登る。4人の健常者のヘルパーも、車いすを引っ張り上げるのに相当重労働だった。車いすに乗せられているしょうがい者も半端な決意で乗っているわけにもいかず、振り落とされないために必死で車いすにしがみついていた。この5人の集団が、山の中腹で休む。その時になぜか、5人の集団は無言だった。これだけ苦勞し、苦勞を共にしたのに会話ができなかった。変な緊張感だけが漂った。明らかに普通じゃなかった。

参加者の1人だった彼は、自分のアパートに帰った後、なにげなく新聞を読んだ。その新聞の内容は、しょうがい児は特別支援学校に、健常児は普通学校に分けられていることの問題についての特集

記事だった。

それを読んだ彼は、自分の体験の違和感に気づいた。車いすの身体しょうがい者と一緒に富士登山をし、中腹で休んでいたときに、全員が会話ができない変な緊張感の原因が、彼の中でわかってきた。健常者としょうがい者が、あまりにも分けられた世界にいたために、上手く付き合えないのが、この休み時間で出たと思った。これによって彼は社会問題に目覚めた。

\*\*\*\*\*

もう一方、しょうがい者が普通に地域で生活を始めたときに、どうしてもヘルパーが集まらず、仕事中の健常者の友達を呼び出して、トイレ介助をしてもらおうとした。呼び出されたこの健常者は、仕事中心なのですぐには行けなかった。このしょうがい者は行政に対してヘルパー派遣回数を増やす交渉もしていた。しかしヘルパーが足りないので、仕事中の健常者も呼ばざるをえなかった。

やっと仕事を切り上げ駆けつけたところ、そのしょうがい者は失便していた。この場面を見た健常者は心底怒り、この国の福祉制度は何なのか？と怒りがこみ上げてきた。それ以来、この健常者はしょうがい者運動へと、のめり込んでいく。

\*\*\*\*\*

僕は生まれつきしょうがい者なので、しょうがい者が生きていく運動をするのは、あたりまえである。しかし健常者が、しょうがい者の福祉の問題に関わるのは何故なのか、知りたいと思っている。健常者が、しょうがい者問題に関わるきっかけは様々だと思う。重要なのは、個人個人の感性にいかに関わるのか？そこだと思う。これは他人にとって代われるものではない。いかに「しょうがい者」とぶつかり合ったり、付き合ったりしながら、その中で何を感じるか、だと思う。

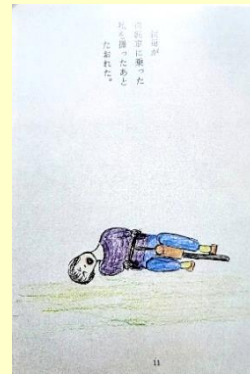
理念だけ先行しても身につかない。上司からの命令だけで働いているだけでも駄目だ。しょうがい者と付き合い合っていて、何か疑問を感じたり、上手くいけなくなったりした時に、自分はどうしたいのか、という必然性の中で問題意識はできていく。とりあえずは自分の感性の間口を広げ、いろいろなものを感じ、古い感性にとらわれず「かいゆう」の仕事をやってみて欲しい。

(かいゆう評議員 天野誠一郎)

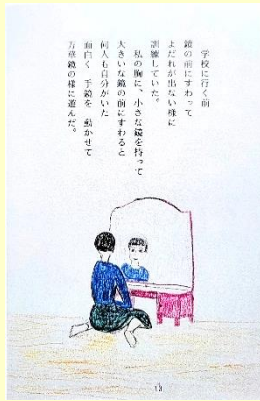


もめんのよう

叔母が  
自転車に乗った  
私を撮ったあと  
たおれた。



風呂で  
煙突にあたって  
やけどした。



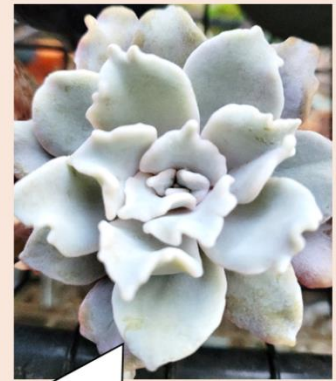
学校の行く前  
鏡の前に出ない様に  
訓練していた。  
私の胸に、小さな鏡を持って  
大人も自分の前にすわると  
何人も自分がいた  
面白く、手鏡を動かして  
万華鏡の様に遊んだ。

『もめんのよう』作品介绍

1990年頃から30年にわたって、ポニー水上が自らの半生を絵と文で表現した作品集。昨年製本され、上巻・下巻の二冊からなる。昭和の時代に遅く生きる姿に、心を打たれる読み応えたっぷりの作品。



お多肉さま日記NO.9 今回はお多肉様の紅葉についてです。多肉植物は紅葉しない、と思っている方が多い様ですが、気温差10度以上で紅葉が始まります。春先まで色の変化が楽しめるのもお多肉様の魅力の1つです。紅葉したお多肉様をたくさん集めましたのでどうぞお楽しみください。



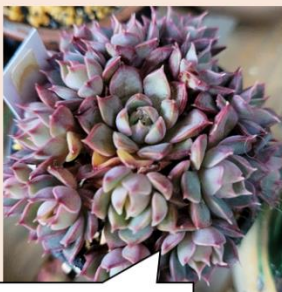
白い子はさらに白く  
クリスパートビューティーさん。  
多肉界では寒い顔と言ったりします。

ピンクからミルク色になった子もいます。この子の名前はメローイエロー。

お隣は赤と青みがかった緑のコントラストが素晴らしいですね〜シルエットといいです。



本当は夏の緑と紅葉と比べた写真をたくさん準備しておけば良かったのですが〜なかなかうまくいかない。狙っていた子は紅葉が進まなかったりして。。



こちら赤に縁だらけ、葉っぱが青みがかっています。



前号にも登場したルエラさん、右が紅葉が進んだ姿です。

いろいろな色のお顔があります。肥料が抜けてくるともっと紅葉が進みます春までにまだまだ変化しそうです。小野肉 多呂子



だんだん黄色くなってきたバルナタさん。



見てね!  
ホームページ

